

巻頭言

宮城大学研究ジャーナル第1巻2号をここにお届けする。先号から半年、しかも繰り返される感染拡大によって様々な活動が影響を受け続ける中にもかかわらず、査読者をはじめとする皆様のご尽力のおかげで無事に発行することができたことを、この場をお借りしてお礼申し上げたい。今号も厳正な査読を経て、報告・資料を含め17篇の論文が採択された。研究課題を概観すると、組織成員のモチベーションに関する検討・地域の買い物弱者についてのニュータウン間の比較・「性の課題」に関する児童養護施設職員の認識の差の検討・映像の中の無音区間が視聴者にもたらす心理的効果などの実証研究、数字のビジュアライゼーションに関する実験研究、都市部の診療所看護師に求められる能力や採血を受ける子供へアプローチに関する質的研究など、それぞれの専門分野の今日的課題や関心、研究スタイルを反映した論考が並んでいる。また、Covid-19 パンデミックに対する本学教員の教育および社会貢献の取り組みが複数報告された。こうした場がなければお互い目にすることもなかったであろうことを思うと、知を創発する場としての研究ジャーナルの意義を改めて確認させられる。

2021年9月現在、世界は未だに出口の見えない災害の真ただ中にある。「国際災害データベース」(EM-DAT)によると、2001年から2019年の間に世界で病原微生物によって引き起こされた災害は752件で、SARS、インフルエンザ(H5N1)などが含まれている。その中でも今回のCovid-19パンデミックは規模、被害ともに群を抜いた大型災害として記録されることになるだろう。2020年が感染制御の母ナイチンゲールの生誕200年であったことは何とも皮肉である。

振り返ってみると、SARS-Cov-2の流行によって教育・研究が翻弄され続けた1年半であった。学術集会は続々と延期となり、さらにオンライン開催へと変化していった。参加者側からすると居ながらにして参加できる学会というのは有難くもあり残念でもある。移動の時間的、経済的コストを削減できる反面、デジタルでは偶発的な出会いは発生しにくく、その場の空気感、興奮、躍動感のようなものを肌で感じることは難しい。

大学の講義も同様である。Covid-19パンデミックが追い風となり、遠隔授業を中心として一気に環境整備は進んだ。しかし本来、「大学に来る」という行為は単に「講義を聴く」ということだけでなく、人とつながり「協働する」「遊ぶ」ということ含む複合的な行為であり、大学という知の実践共同体に参加するということであるはずだ。単に形式知を学ぶのであれば図書館で事足りる。知識を伝達する以上のアルファを伝えるためには、遠隔授業であってもアナログの持つ魅力とデジタルの持つ強みを統合するための仕組みが必要である。さらに現在進行している学生やその予備軍の社会実体験の不足が、今後の大学および社会にどのような影響を与える可能性があるのかを考えていく必要も出てきた。

一方で、私たちが手探りで試行錯誤している間も世界は歩みを止めていない。コラボレーション・ツールには次々に新たな機能が実装され、Work from Home Fatigue 解消の一つの選択肢として仮想オフィスが出現した。いつの時代も必要は発明の母であり、問題の再定義こそ解決策への鍵である。構造的慣性が働こうとも、ハイブリッドな社会は着実に近づいている。私たちがヘラクレスの柱を超えて前に進まなければならない。

今回のCovid-19パンデミックの実践報告は、まず何よりもこの1年半に大学が公器としてどのようにその役割を果たしたか、ということについての記録として重要である。と同時に、それだけにとどまらず私たちが解決すべき課題の資料として活用されるべきであろう。これらの報告から多様な協働が生まれ、さらに新たな果実が実ることを期待したい。

(宮城大学研究ジャーナル1巻2号編集委員長 木村眞子)